

ヘーゲル —精神の旅—

岡 崎 英 輔

この度の私の話は、ヘーゲルを読んだひとなら誰でも知っているだろうことを私なりにアレンジしただけのものになるかも知れません。気を楽しにお聴きください。

最近、ヘーゲルの新しい翻訳やヘーゲルについての解説書などが数多く出版され、ヘーゲルに親しむ環境がいつそう整って来つつあるようです。これにヘーゲルへの共感が加われば、一見近づきにくいヘーゲルも私たちに親しい装いで現れ、深い哲理を語ってくれるかも知れません。ここでは精神の発展を、学術語ならぬ人生用語で「旅」と表したヘーゲルの意図とその思想をたずねてみたいと思います。

(1)

ヘーゲルは1770年、シュトットガルトに中級官吏の子として生まれ、宗教的雰囲気のみで育ち、幼少時から勉学を積みました。成績はたいへん優秀だったようです。のち、チュービンゲン大学附属神学校に進学しますが、神職につく気ははじめからなかったようで、むしろ給費生となって勉学し学問の世界に生きることを目指していた節があります。これらの勉学の期間を通じて、ヘーゲルは古典や近代の文学のエッセンスを読破しています。それも、丁寧な抜き書きを作りながらなのです。この読書法は、書物の著者つまりは相手の立場に立って考えるという習性をヘーゲルにもたらし、のち、それが弁証法的思考と呼ばれるものに発展したと考えることもできそうです。それはともかく、このように勉学を続けながらヘーゲルは当時何を目指していたのでしょうか。

ヘーゲルの青少年期の根本資料や伝記的資料は、私たちに彼のギムナジウム期、それに、神学校へ入学してから卒業し、家庭教師を経て大学にその職を得るまでの彼の思想の展開を示してくれていますが、そこには彼が当代の宗教と政治とに深い関心を懐き、それぞれに執拗ともいえる考察を加えているのを見とることができます。それら考察のうちの一群は、あるべき宗教をめざし、そのためのイエス像を模索している一連のキリスト教論であり、もう一群は、現実の政治の改革を目指そうとする一連の政論です。もちろん、それらは別々の問題として扱われているわけではなく、密接に結び合っているはずですが、では、結び合って何を、どうしようとしているのでしょうか。

それを明言している資料は見あたりませんが、推測することはできそうです。例えば、ヘーゲルはこの時期、さまざまなイエス像を辿りつつ検証し、最後に愛の宣教者としてのイエスに到達しますが、このイエスに彼はもっとも深い共感を懐き、このイエスをみずからと同等ることができた、ですから、ヘーゲルがこのイエスにひとつの使命を託するとき、

その使命は、とりもなおさず、ヘーゲルみずからの使命にほかなりません。その使命とは、分裂状態にある「人間をその全体性において恢復する」(『キリスト教の精神とその運命』)ということでした。現在、人間は宗教においても政治においても分裂状態にある、この状態から人間を取り戻したい、そのために理想の共同体を、「見えざる教会」を打ちたてたい、これが若きヘーゲルの意図したことだったと思われまふ。それも、本性上理性人であるヘーゲルの場合、行動によってではなく、理性によって実現されることなのでした。

ともかくヘーゲルは、この理想の共同体への道を歩んだと言つていいと思ひます。これをキリスト教論のなかでもっとも完成度の高い上引の『キリスト教の精神とその運命』で見つてみましょう。ここでは、まず、イエスと呼び出す役割を担わされたユダヤ教の精神とその悲惨な運命が語られ、さらにこの運命を転ずるべく登場したイエスの愛の宗教とそれが辿つた歴史的運命が精査されるのですが、その結果明らかになつたのは、道徳によつても、さらにはイエスの愛の宗教によつても人間性を全的に恢復するという意図は実現されず、したがつて理想の共同体の樹立も不可能であること、むしろ、分裂し疎外されてある事態こそが人間や共同体の運命なのだということでした。分裂こそが出発点であり到達点なのです。論考の末尾はこのことの確認で終わつています。

これだけを見ますと、ヘーゲルの意図は挫折したかに見えます。でもそうではありませんでした。分裂が運命的な事態であることを確認したとき、ヘーゲルにとってその分裂はすでに和解されている、少なくとも、和解されうるはずのものだからです。運命は和解される、このことを、ヘーゲルは幼いころから親しんできたギリシア悲劇から学んでいました。ですから、この論考の冒頭でヘーゲルがユダヤ民族の陥つた悲惨な状態を運命ととらえたとき、すでにそれはイエスの愛の精神によつて和解されるはずのものであり、さらに、この愛の精神と世俗との間に生み出される分裂状態をヘーゲルがキリスト教の運命と呼ぶとき、この運命も実はすでに愛の精神によつて和解されるはずのものであり、ヘーゲルにおいては原理上、和解されていたのです。ただ、それは、原理上の和解にとどまつていて、まだ現実のものとなつていない。それが挫折のように見えた理由でした。

ではこの和解は、例えばキリスト教論や運命というギリシア悲劇風の用語に依ることなしに、どのようにすれば現実のものとなるのでしょうか。

(2)

さて、ヘーゲルもすでに壮年となりイェナに移り、自らの居所を哲学と思ひ定めていましたから、上の和解の試みはそれら分裂をひたすら冷徹に見据え、原理的に把握し、理解することによつて克服する原理的哲学的な試みとならざるをえませんでした。このことをヘーゲルは、分裂が和解の試みとしての哲学を呼びよせるのだと考えます。つまり、分裂から体系(哲学)がでてくるのであり、分裂こそ哲学の要求の源泉であるとされます(『差異論文』「哲学の欲求」)。

こうして、先に運命と呼ばれたあらゆる分裂の事態、それはつまり現実のことですが、それを和解する新たな企てがいまや理性の場である哲学において行われます。それはヘー

ゲルが以前、時代の深刻な政治情勢のただなかでひたすら「あるところのものの了解」(『ドイツ憲法論』序論)をもとめたのと同じ意図であり、要するに、現実全体の知的把握にほかなりませんでした。当然それは現実とはなにか、それがどこから、どのようにして現在へ成り来たったかという現実とその由来を問いかける壮大にして困難な問いを問うことでもありました。しかも、このような問いを問うヘーゲルは、それに答えることができると自負していました。というのも、ヘーゲルは、人間の知的能力がこれまでに産み出してきたあらゆる作品について驚くべき知識と理解を持っていたからです。それを彼は、当時触れることのできたギリシア・ローマの古典や、ヨーロッパ近代の文学や哲学の傑作など、その殆どすべてを読み、また同時代の自然科学すら研究することによって、獲得したのでした。こうして得られた自負の一端は、古代や近代世界のあらゆる素晴らしいもの、そのすべてを自分はかなりよく知っている、という『美学講義』の言葉にも示されています。

いずれにしろ、ヘーゲルは人間の知のすべてに通じているという自負をもって分裂しつつ和解を求めている現実へ向かい、人間の知が現在の知にまで成りきたった次第を尋ねます。それらが解き明される場が『精神現象学』なのです。

(3)

この『精神現象学』(1807年)について、ここで詳しい紹介や説明はできません。

ヘーゲル自身、『精神現象学』についての「自著紹介」のなかで、精神現象学は生成する知を叙述するものであること、そして、それはさまざまな精神の形態を旅の宿駅として辿り、これら宿駅を経験することで精神は純粹知あるいは絶対精神となることを述べています(ヘーゲルの「自著紹介」1807, 11, 25 [週間一般芸文新聞])。そして『精神現象学』の「緒論」でも現象学で展開される意識や精神の歩みはさながらそれらが経歴する旅だと述べています。このように、意識や精神の歩みは旅のイメージで捉えられているのです。

さて、精神とは、さしあたり人間の知が歴史的に発展して現在へと到ったものとして、文化を支配し時代を動かしている当のものと考えられますが、人間の知のすべてに通じていると自負する哲学者ヘーゲルからすれば、この精神は、現在、完成し絶対的といっている高い境地に達しているはずなのです。ところが、現実の精神は自分をそのようなものとして知っていない。つまり、自覚していない。しかし精神とは、自分の何たるかを知らうとして、どこまでも掘り返してゆくものであり、こうして精神は自分で自分を知らうとする。それは、精神がすでにそうなっている現在の境地を目指して意識が歩みをすすめること、みずからのもっとも幼い過去から現在の成熟した段階に到るまでの成長の跡を辿ることにほかなりません。成長にはいくつかの節目がありますが、その節目にも似て、魂にもその本性にしたがって予め標置された宿駅がある。そのひとつひとつを魂は遍歴するのだと言います。その際、それら宿駅のすべてがみずからの本性に関わる以上、宿駅を辿るとは、実は、みずからの過去の一節々々と関わること、さらに言えば、みずからの過去を改めて思い起す、つまりは内面化し記憶することにほかならない。そしてこの営み、すなわち、内面化し記憶することによってはじめて魂は精神となる。「魂は、自己みずからの余

すところのない経験を経て、自己が本来何であるかについての知に達し、こうして浄化されて精神となる」(『精神現象学』「緒論」)。

当初無自覚だった精神は、いまや自覚的、共同的、普遍的な精神として絶対的な精神となりました。いま、この精神にあっては、当初のあらゆる分裂や対立も現実を構成する契機としてその役割をにない、そのようなものとして承認され知の体系のなかに配置されまです。そのような知が絶対知と呼ばれ、その体系が学(哲学)なのだとされます。そしてここに到れば人間性を恢復するというヘーゲルの初発の意図も達成されるはずです。そしてそれが実際達成されるのが『論理学』においてであることは言うまでもありません。『精神現象学』は、精神がそれへ向かってみずから高まりつつ高みへと辿る次第をひたすら叙述するのです。

(4)

みずからのうちに人間の知が息づき、それらが現在において完成したと感ずるヘーゲルは、その知が名実ともに最高の普遍的な知であることを示すため、意識つまりは精神に旅をさせました。その旅をしたのは精神そのものですが、その精神とは、とりもなおさず、ヘーゲルの精神でもあるわけですから、ヘーゲルはここでみずからの精神を普遍的な精神へ、言いかえれば自我を普遍へと拡大していると言うことができます。

このように、精神現象学がヘーゲルそのひとの精神的自我の展開の叙述でもあるということが、現象学という旅の道筋を私たちが辿るのを難しくしているようです。つまり、ヘーゲルへの共感薄いまま旅の道を歩もうとすると、私たちはいたるところでつまづきます。どこに道があるのかと途方にくれることすらある。ヘーゲルは、道筋と最後の目標は哲学者である自分には見えていると言いますが、旅する者の中には、ヘーゲルの言う「疑いの道」、さらには「絶望の道」とはこのことかと言いたくなるかも知れません。(もちろん、ヘーゲルは別の意味で言っているのですが)。しかし、それらは多くの場合、『精神現象学』の欠点というよりも、むしろ逆に現象学を魅力的なものにしているようです。そうでない場合も多いですが。

一般に、旅とは、わが家を離れて一時他郷に行くこと(『新潮国語辞典』)とされますが、わが家をいまいる故郷と読み替えることができるとすれば、旅とは故郷を離れて一時他郷に行くことになります。とすれば、いま現在の生き方にふと疑問を感じ、その生き方を見直そうとすることは、比喩的に言えば、旅に立つことにほかなりません。その際、旅の行程を導くのは、良きにつけ悪きにつけ故郷の思いでしょう。してみれば、旅とは、その実際がどうであれ、故郷から出てさまざまな経験を経て故郷へと還る円環なのです。ヘーゲルもみずからの現実から出発してみずからの、しかも名実ともに高められた現実へ還ってきました。これは、現実という故郷から故郷への環帰にほかなりません。そして、このような旅は現象学だけのことではない。私たちが、いま、ここにある、われの事実から発してそれを思い考え、それへと還る、これが哲学の営みなら、それも旅と異ならない。し

てみれば、『精神現象学』も哲学も旅のイメージから遠いものではないのです。

そんな思いでヘーゲルを見てみました。ご静聴ありがとうございました。

(弘前大学人文学部名誉教授)